

---

# 古のモノ

YUUMI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古のモノ

### 【Nコード】

N1289R

### 【作者名】

YUUMI

### 【あらすじ】

古いにしへから始まる物語。

ソレは危険極まりないモノとして封印されたはずのモノ。  
しかし、時空を超えて一人の少女の元へと現れた。  
唯一無二の主にと少女を望んだから。

神話的な話、歴史等が出てきておりますが、お名前をお借りしているだけです。実際に語られている話とは全く関係ございません。ご了承ください。

## プロローグ（前書き）

更新亀足ですが、お付き合いいただければ幸いです。。。

## プロローグ

漢帝国が滅び、世は三国時代になった。その後、一旦、晋が天下統一を果たすが、すぐに滅び、多数の国家が乱立する五胡十六国時代を迎える。その中から、やがて魏・宋の南北朝時代が少し続くが、それも100年ほどあまりで崩れ去った。宋の後には齊、梁、陳などができ、魏は東西に分裂した後、東魏が齊、西魏は周にと代わった。隋の揚堅（文帝）となった方が、梁を倒し、江南の陳を倒して、晋から数えても280年、漢から数えれば350年ぶりの安定した天下の統一を実現した。

そう丁度、世が落ち着いてきた頃、都の一番外れに在る少し大きな屋敷が不自然に、だけど当たり前のようにその存在感を現して建っている。とても静かな夜。

シ……ン……、と静まり返った屋敷。その静かな屋敷の中で、豪華な服を着た人や使用人のような下女、下男達は一樣に駆け回り、のた打ち回り、苦痛に顔を歪めている。

その全ての瞳は最初、突然己の身に起こった現象を一瞬理解できず、どこか虚空を眺め視線を彷徨わせながら、身を擦る。声は奪われてしまったかのように口をパクパクと動かし、その唇からは微かに苦しむ風の吐息だけがヒュッ、ヒューと不規則に聞こえる。唇の端には唾液が泡を吹いて溜まり、毒を飲んだ者のようにしか見えな。その全員が全員、ふと一点に視線を集中させる。その視線の先には、冷笑を浮かべて佇んでいる男。

豪華な服装を身に纏っている。しかし、それを着ている本人と衣装が、かなり不似合いだった。身体も髪の毛も顔も全て、今すぐにも死を迎えるかのように肉がそげ落ち痩せこけている。その中に唯一、その瞳だけが、不気味にギラギラと憎悪と殺意に満ちていた。その様子を眺めていたその男は、しばらくして、ある一人の少女に目を留め、足を動かす。男が、その少女に、手を伸ばし立ち上が

らせると、今まで苦しんでいたはずの少女は、解放されたように瞳に涙を浮かべて息を思いつきり吸い込む。

「……死にたくないよな？ そうだよな。まだ、好きな男とも出会ってないし、好きなものも買ってない。やりたいこと残ってるよな。生きたいよな？ な？」

男は、少女の顔に顔を近づけ、答えを要求する。少女は、その不気味さ怖さ故に狂ったようにココククと頷く。それを見た男は、ニヤリと口元だけに笑みを浮かべ、少女の首を両手で優しく撫でる。

「俺はとても慈悲深い。だけどな、一つ。許せないことがあるんだ。それはな、お前が俺を伴侶と認めずに、罵声を浴びせ逃げたことだ。俺はすごく悲しかった。こんなにも愛してやっているのになぜ、逃げるんだと。」

男は言いながら、段々と両手に力を入れていく。しかし、その少女は、すでに息をしていなかった。少女が息を整える前に首を絞め始めたからだ。だが、男は、それに気付かず、ますます手に力を入れて言葉を続ける。

「愛していた。とても。なのになぜ、逃げる？ だから、俺は、決めた。誰かに取られるくらいなら、俺の手で殺してやるうと。どうだ？ 嬉しいだろう？ 優しいだろう？ ……？」

そこで、男は、少女が白目をむいて死んでいることに気がつく。

男は、つまらないというように両手を離し、今だ、のた打ち回っている者に眼を向けた。既に息を引き取っている者が大多数の中、唯一、一人、豪華な服を着た女だけが、のた打ち回って生きている。

男は、眼を細めてその女を見る。

「……………お前。」

その声と共にその女は、ピタツと動きを止めて口の端を微かに上げ、ゆっくりと立ち上がる。ヒタと男を見据え口を開く。

「……………財に目がくらみ道を外しただけでは飽き足らず。人の命をも己の手に握るか。これを、人は、愚かと言う。ご存知か？」

女は言いながら、その豪華な服を脱ぎ捨てる。その下から現れた服は、国が大切にするという巫女が着る衣装。だが、本当に巫女の力を持つものはいない、と言われている。

男は目を見開き、掌を女に向ける。途端に空気が振るえ波打ち、物凄い勢いで女に向かっていく。女は扇を持った腕をバサツと振るい、難なくそれを薙ぐ。それを見た男はギリツと歯噛みし、それを認めようとはせず、次々と女に向かって放つ。女はそれを舞いでもしているかのように薙ぎ払う。しばらく、攻防戦が続くと男は肩で息をして膝を付いた。女は視線だけで男を見据え唇を開いた。

「……………そなた、力心変宝珠を持っているな？ それを離せ。御主が、ソレを扱うは無理。そなた自身を滅ぼしてしまいかねない。それに、ソレは唯一無二の主だけを探しているのだ。その証に、そなたは、その宝珠の力を発揮できていない。副作用で体が蝕まれているであらう？」

女は語気を強めて言うが男は首を左右に振る。それを見てとった女はならば、と言い置いて男に近づく。男は身を縮めて何かを護ろうとする。女は扇を振るい男の身を弾き飛ばした。弾き飛ばされた男は壁にぶつかり、ズルツと崩れ落ち、気を失った。すると、男の身体、もといその男の衣装が淡く光りだし、女はその光りの弱さに

も関わらず、袖で顔を覆う。

「……私まで引きずり込もうとなさるか。宝珠よ。答えは、否。今、ここで封印されよ。」

それを理解したのか、ソレは光りを収め、姿を変える。今度は小さな手鏡へとその姿形を変えた。女は大事をとってか、目を伏せて唱える。

『東は、蒼き龍。西は、白き虎。南は、朱の雀。北は、玄の武。各々の御力により、今此処に人の心を玩ぶ輩を封じ、捕らえよ。全ては、天命のままに。』

そのモノは、急に光を帯びヒュツと空気に紛れる。女はホツと胸を撫で下ろし、指を鳴らす。すると死体の全部が消えうせ、そこにはひと形の紙だけが残った。

時は流れ、科学では証明のできない出来事を否定する世になり、好奇心の中にだけ存在する不可思議な出来事。誰もが好奇心のみでソレを言い合い、時に楽しむが決して心の奥底ではそれを信じる者はいない。受け入れがたい非現実的なモノからは恐怖しか生まれないからだ。現実に疲れ飽き、たまにそれをほんの少し認め受け入れることで刺激の無い現実にほんの少しの刺激を求める。今。

しかし、誰も信じようとはしないソレは確かに存在し、今も在る。だが、人の心が弱り、己で理解のできない出来事を脳が、自己判断し記憶から消し去り、自動的に『現実』を作り変える。

そんな現代。

2011年。ここは、日本。

とても暗く寒い部屋の中。様々な国の様々な骨董品が立ち並び場所を競い合うかのように置かれている。高価なモノから、安物だがとても奇妙なものまで。

そのどれもが埃を被り、そのもの本来の輝きを失っている。そんな中、古い何かの言葉が書かれている布に巻かれ、妙に興味をひきつけてしまうそのモノ。

その部屋の中で突如、弱々しく淡く光りだす。まるで何かを求めるときのように。

ソレは、ふわっと浮き上がったと思いきや弱々しく元の位置へと戻る。

『 ……早く……早く……相応し……き……彼の……者を……』

この日本にも、好奇心のみで不思議な出来事を楽しむが、決して本当には信じようとしなない少女がまた一人。

## 価値観の違い

「本日、我が校に転入していらつしやつた榊愛華さんです。」

教師というよりビジネスマンという言葉が似合いそうな担任は、教室というより客間といった方が相応しい部屋を見渡し、愛華を紹介してくれる。その言葉を受けて、愛華は頭を下げた。下を向き、長い髪に隠れたその顔には嫌悪の表情が張り付いていたが、それも顔を上げた瞬間、満面の笑みに変わっていた。

「榊愛華です。よろしくお願いいたします。」

自分の自己紹介を改めてし、お金持ち学校の生徒の面々を見渡す。いくら、笑顔を表面上取り繕っていても、ドラマの撮影でもなし、愛華は口の端を微かにピクピクと震わせていた。

「たたく。なんだってこんなお嬢様、お坊ちやま学校に転校しなきゃなんないの。確かに高校へ行きたいとは言ったよ?! だからってなんで、こんな学校?! 最っ悪! あんの馬鹿マネー!!」

数週間前。

ドラマの収録もやつとのこととで終わり、今度は新番組の打ち合わせへと向かう移動中の車の中。

愛華は撮影現場にあった自販機で買ったジュースをチビチビと飲みながら、マネージャーを見遣る。

「で? 今度は私が幽霊なり、怨霊なり、怖い体験したり、調査したのをテレビでやるんだっけ?」

「そう。もう、学校の方には手続き済ませてあるから、大丈夫。だから、今日はほとんど挨拶のみね。なにしろ、あなたがちゃんと調べない限り、打ち合わせも何も無いもの。」

そのマネージャーのキツイ言葉に愛華は顔をしかめる。

「私だけじゃないでしょ？」

「それはそうだけど、一番初めのネタは貴女なんだから同じことよ。」

返ってきた言葉に愛華はため息交じりに呟いた。

「なんか、私、責任重大って感じ。ま、高校行きたかったから別にいいけどね。」

「では、柗さんは、瑞穂さんのお隣に座って下さい。」

そう言われて、愛華はその瑞穂さんとやらの隣の席に腰を落ち着かせ、今朝からお馴染みになっている溜め息を静かに吐き、周りをそっと思渡す。

流石と言うか、お嬢様、お坊ちゃまだけあつて芸能人が転校してきたとしてもあからさまに騒いだりしない。ただ、やはり、好奇心とミミハーな部分は同じなようで、おしとやかにお上品に囁きあっている。

「柗さん、わたくし、瑞穂 璃久ですわ。なかよくしましょうね。」

そう言つて声をかけてきた隣人をチラッと見る。金髪に近い髪がゆつたりとウェーブが掛かり、少し日本人離れた顔立ち。確かにいいところのお嬢様だと一目で分かる。

今度は、体ごと向き直り愛華は、人懐っこい笑みを浮かべて見せる。

「ええ、よろしく。璃久さん。あ、それと私のことは柗ではなく、愛華と呼んでいただいで結構です。」

過去、ドラマなどでお嬢様を演じただけあり、愛華の受け答えにはお嬢様らしい気品がでていた。その愛華に璃久さんは、クスツと笑みを零すとそっと思打ちしてきた。

「そう？ ありがとう。でも、愛華さん。顔に“なんでこんなお金持ちの学校に転校しなきゃならないのよ”ってでていますわよ。お気をつけて。」

その璃久さんの言葉に愛華は、僅かばかり顔をしかめると思打ち

し返す。

「でも、周りの方達は気付いてないんじゃないやありません？ でも、璃久さん、なぜ私に声をかけてくださったの？ 他の方達は明らかに私を避けていますけど。」

「あら、そんなの。愛華さんのファンだからですわ。」

「つこりと笑みを浮かべる璃久の表情を見て、愛華は苦笑する。

「なるほど、じゃあ、璃久ちゃんの前で演技は必要ないって訳ね。つて、璃久ちゃん、よくテレビ見るの？」

「いいえ。私はあまりテレビを見るほうではなかったんです。最初は、雑誌というものに貴女の姿が載っていたらして、わたくし、‘まあ、なんてお綺麗な方なのかしらっ！’ って感動しましたの。それから、貴女の載っている雑誌や本を買い始めて、そこでライブというものを知り、それからライブという所に行くようになって、お父様に頼んでテレビを自分専用を買って頂いたの。」

あまりにも、この“榊愛華”という芸能人が好きなんです、という表情と態度に愛華は顔を真っ赤にして、顔を逸らす。

「……………ありがとう。」

その愛華の反応に璃久さんは、お嬢様らしいコロコロした笑いを漏らした。

「クスクス。やはり、愛華さんは愛らしいですわね。でも、気をつけてくださいね。」

「へ？ なんで？」

その愛華の言葉に璃久さんは、これから、何か楽しいことがあるんですよ、と言っているような表情になる。

「男子生徒にはお気をつけ下さいな。芸能人だからという理由で恋人になりたいという失礼な方たちが現れますから。」

その言葉にさもありませんとふむふむと相槌を打つ。

「あと、興味あるかしら？ この学校には七つの不思議がありますの。」

最後まで言い切つて、璃久さんの瞳がキラキラと輝きます。

「どんな話？」

その言葉に、愛華が顔を近づけて興味津々と反応すると璃久さんは、急に真面目になって話し始める。

「ただの七不思議ではないわ。ここの学校長が趣味でアンティークを集めているのですけれど、その中の一つが夜な夜な光っては、喋るんです。」

「へえ。てか、そのどこが怖いの？」

その愛華の答えに璃久さんはちよつと拗ねたのか少し怒ったような表情になる。

「愛華さん、話はこれからですよ。そのアンティークは、決まって“彼の者を”というんです。これは、事実ですわ。なにしろ、私が直に聞いたんですから。」

「へえ、彼の者”を、ねえ……。まるで、誰かを探しているみたいね。そのアンティーク。」

確かに、色々面白そうな話ではあるけど、本当かどうかはねえ……。つか、本当じゃなくてもいいんだっけ？

興味なさそうに愛華が言っていると、璃久さんはニコツと笑む。

「愛華さん、今夜、人を集めて肝試しというものをやりませんか？」

「はへ？ 肝試し？ あ……。。」

そういや、今日、夜、収録なかったよね……。ま、あってもマネージャーへの嫌がらせってことで。

急に愛華は、黒い瞳に悪戯な輝きを持って璃久さんを見た。

「OK。やる。」

そんなこんなで、肝試しのメンバーを集め始め、ようやく放課後か、と思つたとたん愛華は、うんざりと嫌そうな表情を露骨にも顔の貼り付け、璃久さんとその同僚達を教室の入り口に突つ立たま見遣る。その愛華の表情の理由は、璃久さんの姿が見当たらないので、化粧直しと愛華がトイレに行っていたほんの少しの間に作り

出されていたのだ。

お嬢様、お坊ちやまの手には、ワイングラス。そして、どうやっても、どう考えても納得できない井出達。つまり、ドレスとスーツで、楽しく会話をしている。極め付けが、部屋の装飾。昼間は、そこは確かに多少違和感のある教室ではあったが、学び舎という雰囲気はまだ、あった。が、しかし、今は、個人個人の机はいつの間にもやら消えうせ、変わりに大きなバロック調のテーブルとその上に豪華なディナーが並べられ、部屋の一角ではホスト・ホステスじみた連中がお嬢様、お坊ちやまの相手をしている。

どこからどう見ても、お嬢様、お坊ちやまの酒乱パーティじみてるわ。しかも、それに違和感がないのが不思議……。なんか、いつペんお嬢様、お坊ちやまの頭ん中みてみたいわ。っーより、もう、いっそのこと、いちゃってくださって感じ。

はあ……と長い溜め息を落とすと同時に、肝試しを思いついた璃久さんを探す。

テーブルの周り、ダンスを踊っちゃてる集団を見回して見るがどこにもいない。

もしか、と違って愛華はホスト・ホステス集団の方へ恐るおそる視線を向けた。

「……………うっ…そ…。」

璃久さんは、恐らくナンバーワンであろうホストの膝の上に乗る、優雅といふかなんというか、色気を出しまくってキスをしていた。璃久さんとそのホストが離れると璃久さんは、甘えるようにそのホストにしなだれかかる。

その瞬間を目撃した、愛華は唖然と凝視していたが頭を振り、気を取り直して、そのメンバーに近寄っていく。すると、やはり愛華が芸能人であるため、ホスト全員が好奇心の溢れる、または、仲良くしておきたいという視線で愛華を見る。

だが、その中に約二名、明らかに他のホストと違った視線があった。一人は、璃久を膝に乗せているホストだ。表情は他のホストと

変わらないが、冷たい眼をして愛華を見ている。

芸能界に入って、そういう視線もその視線が素人には気がつかない種類のモノだと愛華はすでに学んでいる。

これは、あきらかに璃久さんも他のお嬢様達も分からないだろう。その視線の中にほんの少し、嫌悪と拒絶の感情が見えることも、この清らかな拒絶されたことのないお嬢様方は気付きもしないし、その視線の冷たさは璃久さんがキスをせがんだせいだろうと直感し、愛華はそつとため息を吐く。

もう一つは、ホスト店のマネージャーなのだろうか、眼鏡をかけている黒髪のアホは他の愛想のよい表情をしているホストと違った無表情で愛華を見てくる。その視線からは、感情が一切読めなかった。愛華は視線をホスト達から逸らし、璃久さんに声をかける。

「璃久さん、一体これはなんなの？ 大体、私たち未成年でしよう？」

愛華は、怒り半分、呆れ半分と冷たい調子で璃久さんに答えを求めた。すると璃久さんは、ニツコリと笑みを浮かべる。

「そういえば、愛華さんは、知らないんですしたわね。毎週、週末の放課後はこのようなパーティを開催するんです。どうぞ、しばらくは、愛華さんも楽しんでらして。」

その璃久さんの爽やかさに呆れ、瞬時に考えた。

今、怒った演技をして、うまくいけば、璃久さんを連れて行かなくて済むかも…。

次の瞬間、愛華は目の前の璃久さんの頬を軽くトントンと視線を合わせるように促す要領で、掌で叩く。

その行為にびっくりしたのは、周りに居た数名だけだった。その面々は、愛華を見て驚いた表情で固まっている。

愛華は、それを一切無視して璃久さんを冷たい表情で見下ろす。

「学校の行事を悪く言うつもりはないですが、貴女は、放課後と仰いましたし、私にとってその放課後の時間が限られていることを貴女は分かっていると思っていたのだけれど？ それと…。」

そこで、愛華は、チラツと璃久さんを膝の上に乗せているホストを見る。

「芸能人は、他人を喜ばせたり、楽しませたりするのが仕事だけれども、あなたと同じ人間です。それ以上でも、以下でもありません。」

静かに言い切ると璃久さんに一瞥を与え、回れ右をして教室の出口へ身体を向けるが、制服のスカートを引っ張られ、柔らかい何かの上にストーンと座る。

突然のことに愛華は、慌てて自分の状況を把握しようとして後ろを振り返った。

さっきまで、膝の上に璃久さんに乗せていたホストが、愛華のすぐ後ろからニツコリと満面の笑みを愛華に向けていた。そして、その横、少し離れた所に璃久さんが、顔を真っ赤にしてしおらしく座っていた。

「……愛華さん、ごめんなさい。」

璃久さんが泣きそうな表情で謝ってきた。それを無視して愛華は、後ろのホストに問いかける。

「手を離してくれない？ あなた方にかまっている余裕、今はありません。」

そういつて、もう一回後ろを振り返り、自分を捕まえているそのホストの手を指差した。だが、当のホストは相変わらず、満面の笑みの中、唯一氷点下な眼を愛華に向ける。

「そんなこと言わないでください。璃久様が、愛華様を捕まえていて欲しいと仰ったのでこのように。私も、こんな美人を捕まえていられて嬉しいですね。」

その言葉、特に美人だと言われるのは嬉しいが、どうにも厄介な体勢に愛華は、溜め息を吐いて璃久さんを見る。

「璃久さん、このホストさんが、貴女じゃないと嫌だって言っていますけど、それともう一度、貴女が味わいたいんだそうですよ。」

サラツとそれだけの明らかな嘘八百を愛華が適当に言い切ると璃

久さんはそれに過剰にも反応し、顔を上げて愛華を捕まえた状態のホストの首筋に抱きついた。

愛華は、そんな馬鹿げた状況に陥っているというのに相変わらず愛華を捕まえている手を離そうとはしないホストの膝の上で足を組み、その上に肘をつけて、呆れた表情で自分の真正面を睨み据える。

しばらくしても、自分の後ろの状況が一向に動きもしないので、愛華は、いい加減その体勢にも色々耐えるのにも飽きて、そのホストの手をなんとか自分で外し、立ち上がる。

「璃久さんは、その方とどうぞ、楽しんでらして。でも、その前に学校長のアンティークのしまっている閲覧室の場所を教えてください？」

その時、あの眼鏡をかけている黒髪のホストと璃久さんとキスをしているホストの視線が一齐に愛華に向けたのに気が付いたが、愛華は、璃久さんに顔を向けて答えを待つ。愛華の要求に璃久さんは夢見がちな表情で愛華を振り返る。

「愛華さん、本当にごめんなさい。貴女を怒らせるようなことをしてしまって。学校長の閲覧室は、ロビーの案内図に載っていますね。でも、お気をつけてね。」

「……璃久さんも、ね。」

愛華は、そう言ってチラッと璃久さんのお気に入りであろうホストを一瞥し、教室を後にする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1289r/>

---

古のモノ

2011年3月9日18時10分発行